

島根県の県庁所在地(松江)の由来は何ですか？

「松江」という地名の由来については古くから諸説あるが、主なものは次の三説である。

まず通説としては『懐橘談(かいきつだん)』『雲陽誌』という江戸期の地誌によるもので、松江城を築いた堀尾吉晴が、松江の風景が湖面に美しく映え鱸(すずき)や蓴菜(じゅんさい)を産するところが似ているとして、中国浙江省の淞江府(ずんこうふ)から命名したというものである。

次に新井白石の著『紳書』によると、堀尾氏の家臣で松江城の縄張工事にあつた小瀬甫庵(おぜほあん)が「鱸の名所也」として命名したとある。

また『雲陽大数録』では円成寺開山春龍和尚の命名とし、「唐土ノ松江、鱸魚ト蓴菜ト有ルカ故名産トス、今城府モ其スニコウニ似タレバ、松江ト称スト云々」と記されている。

これらの説にはさまざまな疑問があげられている。「松江」という地名は開府以前からあつたともいわれるが、その示す地域も定かではない。

昭和53年(1978)、島根大学の入谷仙介教授は地元新聞に次のような推論を発表した。「松江」は呉江県(ごこうけん)の太湖から流れ出る呉淞江(ウースニコウ=川の名)に由来し、命名に苦心していた堀尾吉晴が、渡明の経験のある春龍和尚の進言もあつて「松江」を採用したのではないかというものである。

由来はこのように現在も解き明かされてはいない。しかし、風景の美しいことと、食物のおいしいことが松江の永遠のシンボルであることは確かなようだ。